

ワンポイント・ブックレビュー

デイヴィッド・K・シブラー著 森岡孝二他訳

『ワーキング・プア アメリカの下層社会』岩波書店（2007年）

本書はアメリカの貧困層の現状について長期間の取材をもとに克明に記されたジャーナリストのレポートである。原書は2004年に刊行され、全米でベストセラーとなったという。

序章で「勤勉は貧困を解決する」というアメリカの神話に疑問を呈し、市場至上主義の社会が見過している、「懸命に働きながらも貧困から抜け出すことができない」ワーキング・プアを「見えるようにする」ことが本書の目的であると述べる。

全部で11の章によって構成されているが、各章は切り口をかえながら、1名から数名の労働者の労働と生活について記述していく。第1章冒頭では、ワーキング・プアの自立を支援するための勤労所得給付金の受給手続きが煩雑であるため、代行業者が横行し、金をむしり取っている実態が書かれる。厳しい労働実態を描く前に、ワーキング・プアに追い打ちをかける「自由な社会」の実態を真っ先に描くことで、この問題の本質がどこにあるかを明示している。

第2章以降では、子供をかかえながら懸命に働いているがスキルが足りず最低賃金から抜け出せない女性労働者、縫製工場以最賃以下の賃金で働かされている海外からの移民労働者、住宅ではなくトレーラーでの暮らしを強いられて農場で働くメキシコからの出稼ぎ労働者、貧しさから罪を犯し、犯罪歴のために就労が難しい労働者などのさまざま人々が登場する。住宅が不潔である、栄養のある食事がとれない、教育が十分に受けられない、医療ケアが受けられない、といった生活環境の困難があり、父親からの性的虐待、母親の育児放棄、ドラッグの誘惑、本人の怠惰など家庭や地域の間人関係の問題をかかえ、救済支援制度の欠陥に加えて、助けとなるべきケースワーカーや教師の能力の欠如と役所の事務的対応がもたらす困難など、ワーキング・プアを再生産する要因が複合的に働いていること、それらが共通性をもっていることが読み進むにつれてより明らかになっていく。また、チャンスを生かし、貧困から抜け出しつつある「例外的な」人々も描かれる。

このように労働実態だけでなく、貧困層自身の心の問題に踏み込んで丹念にレポートされているため、読む側は、ワーキング・プアの問題が結局、社会の仕組みに大きく起因していることを改めて理解することができる。

最終章では、最賃の引き上げをはじめとするワーキング・プア対策についても詳しく考察される。そして「貧困の淵で働く人々は、アメリカの繁栄に欠くことのできない人たちであるが、彼らの幸福は社会全体で欠くことのできない部分としては扱われていない」「恥を知るべきときである。」と結んで、ワーキング・プアの問題に取り組むことの重要性が強調されている。

日本においても昨年来、ワーキング・プアということばが定着し、社会問題として認識されてきたが、アメリカにおける実態をしっかりと見ておくことは、それを後追いしている日本における実態を分析する視点をつかむことになると考える。（T・S）